



高橋浩一郎 著

生存の条件

—21世紀の日本を予測する—

毎日新聞社, B6判, 317頁

歴史家は後向きの子言者と言われる。いわゆる進歩派の人々は歴史探索は前向きでないと主張したり、あるいは過去の歴史を見るにしても独特な極論を下すことがある。しかし、私は歴史における教訓は現在の位置づけを正しく与え、未来の可能性の幅を示してくれると思っている。すなわち完全に独立の過去も現在も未来も世にはないだろうと考えられるからである。

ところで、歴史には記述の歴史（ヒストリー）もあれば精神的歴史（ゲシヒテ）もある。またある意味で可逆か不可逆かという問題もある。この評価はもちろん歴史観によってちがう。

ところで、今我々が現在から未来を見るとき歴史上またとない非常な危機にさらされていることは誰にも感じられる。これが過去の歴史上、しばしば起った危機なのか（現在の終末）？二度とない危機（未来的終末）なのか？現在の学者は地球上の生物（とくに人間）が極めて僅少な確率の上に生存していることを示している。その生存条件が少しくずされても（おそらく）雪崩式に破局に至るといことも考えられる。そのような危機を一科学者からの発言として述べたのが本著であり、このような執筆は日本において極めて貴重なものと思われる。

その目次は次のようである。

1. 自然と歴史

歴史研究の視角と方法を述べ、風土論的接近方法が1つの研究手段になることを指摘する。

2. 人口の歴史

人口の増加は人類の発展の歴史である。しかし、これに関係する因子は自然環境だけでなく人間の要素が大きく効くので難しいが、大雑把には生産力によってきまるとも言える。もちろん多くの因子の複雑なバランスが作用する。この考えに基いて主要国の人口の変遷や人口増加の法則や食糧問題を具体的に述べる。

3. 歴史における資源

人間の歴史と資源とは関係が深い。その概観と、資源のもつ意味、水資源をはじめ諸資源の詳述がある。

4. エネルギーと文明

文明の歴史はまた火よりはじまるエネルギーの歴史でもある。この消費が現代までどう変遷してきたかが述べ

られる。

5. 食糧を求めて

人間の歴史は衣、食、住がなくては成立しないが、その中で食糧が重要であり、とくに飢饉との戦いが述べられる。そして現代とくにきびしい食糧問題が概説される。

6. 災害との戦い

進化する災害、とくに地震、火災、風水害、高潮害などが要領よくまとめられている。

7. 気候の変遷

これは気候変動の概論であり、そのエッセンスが述べられる。

8. 気候の変化と歴史

社会と気候の変化については著者のユニークな論説がある。

9. 歴史の中のリズムとパタン

少し数学的になるが歴史上の様々の周期変化が詳述される。

10. 人間活動の巨大化とその影響

都市化、公害の拡大、気候に及ぼす人間活動など現代の深刻な問題が述べられる。

11. 未来への教訓

「転換期にある現代」、「輸入が完全にとまったならば」、「エネルギー消費の限界」、「国土計画における集中と分散」、「社会変動の予測」、「未来への方針」、このような興味あるテーマにつき著者独自の解説が展開される。

そして「おわりに」の項に、この本は9年ほど前の著書「生存の限界」の改訂版ということになったようだがさらにさかのぼると20年前に考えていたものと大差ないことを告白し、この問題に関係した今迄の研究活動（文献数）をグラフに画いて解釈を加えている。そして最後に「本書がどの程度世の中に入れられるかわからない。しかし、現在世界は激動期に入っており、一步を誤ると日本はどうなるかわからないといえそうである。冷静に将来を見きわめ、対応していくことが必要であり、その意味を含めて書いた」と言われている。

歴史を見る目には悲観的なものもあるし楽観的なものもある。しかし、私としては時・空間的にそして精神・物質的に緊張した展開をするものと思うし、その緊張の場の頂点で偶発的発展の要素も十分にあると考えているのだが、私達の科学者の大先輩がこのような異色な著作を完成されたことに多大の敬愛と興味を感じざるをえない。是非多くの読者が、このテーマを共に考えてくれることを切望する。

(内田英治)